

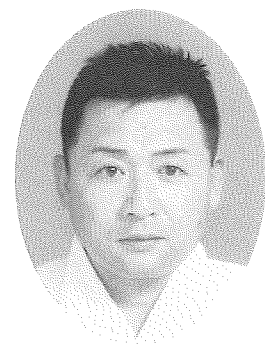
神 祭



三重県神道青年会報 第 33 号

信 頼

会長 中野 雅 史



平素は、青年会諸行事活動等におきまして、役員を始め会員の皆様方には格別のご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年九月六日、秋篠宮家に悠仁親王殿下が御誕生遊ばされました御慶事に対しまして、謹んで皇室のご安泰、弥栄を言寿ぎ奉り、親王殿下のお健やかなる御成長を御祈念申し上げます。

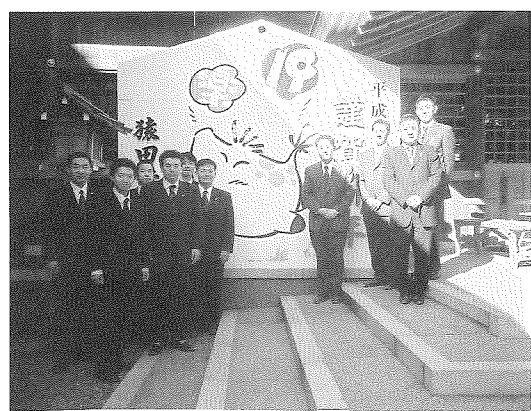
八月十五日の終戦記念日には、小泉前総理が靖國神社に参拝され、御英霊に感謝の誠を捧げられました。九月には安倍内閣が発足致しましたが、安倍総理も引き続き靖國神社に参拝していただけるものと信じております。お国の為に尊い命を捧げられた御英霊が眠る靖

を上げる事ができたものと確信しています。御協力をいただきました皆様方に改めて深く感謝申し上げます。

國神社こそが、我が国唯一の戦歿者追悼における根本であると考えています。私たちはその事に誇りを持ち、更に結束を強固にし、国民を代表する内閣総理大臣の靖國神社参拝の定着に向けて、皆様方と共に推進運動を行っていきたく思っております。皆様方の活発な若い力に期待致します。

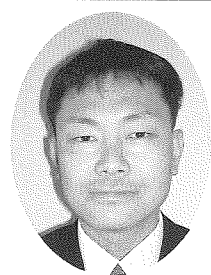
平成十五年度からお預かりした会務も早いもので四年の歳月が経ちました。役員を始め会員の皆様方の心強いお力添えと団結力のある行動により、恙なく二期四年が過ぎました事を心より感謝し、御礼申し上げます。特に平成十七年三月に伊勢の地で開催されました「神宮研修会」、そして同年六月に行われました「御樋代木奉迎送」など、大きな行事を皆様と共に取り組み、経験する事ができました。役員会員が一同一丸となり、お互いの強い結束と信頼感で乗り切り、奮励努力し、その結果、良い成果

て自分の気持ちをしっかりと相手に伝える事ができます。そして相手の気持ちも理解する事ができます。一人一人が心を通い合わせる為に言葉に出して自分の気持ちや考えを伝え合う事で、お互いが分かり合えるのではないのでしょうか。どうかこれからも青年会の活動において積極的に意見交換し、更なる研鑽を積み重ね努力して、会を盛り上げていただきたいと思っております。最後になりましたが今後の会員諸兄の御支援と御協力をお願い致しますと共に、皆様のご健勝を心からお祈り申し上げます。四周年本当に有り難うございました。



二年間を振り返って

副会長 高橋 弘 幸

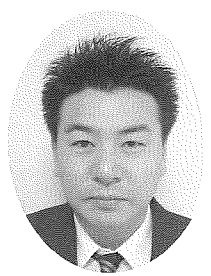


平成十七年四月に三重県神道青年会副会長の重職に就任頂き、早くも二年の任期が終わろうとしています。中野会長・中野副会長を始め役員・会員の皆様のお力添えを賜り、大過なく役目を務めさせて頂きましたこと、先ず以て厚く御礼申し上げます。

神青の活動に於いては、一昨年九月開催の東海五県教化研修会の担当県となり、その運営に腐心したことが大きな出来事でありました。実はその三月に神宮研修会を担当したこともあって、神青にとり大きな行事にも関わらず、役員の対応は非常にスムーズであったと記憶しております。また御遷宮の諸祭が十七年の五月より始まり、御神木奉搬の県下奉迎送では、神社庁のご指示の下助勢に当たったことは、将に二十年に一度の事で感激の極みでありました。

二年間を振り返って

副会長 中野 哲 彦



私は、青年会の活動は、常に社頭にフィードバックさせるべきであるという事を念頭に置く必要があると考えます。それは活動そのものもそうですが、例えば役員会における活動報告や収支決算報告の仕方なども然りです。或いは神社界における先輩後輩の付き合い方などもそうです。その結果をお宮に持ち帰ってもらい、実際に社頭で活かして頂けたらという点を、私は副会長として活動の要点としておりました。力が及ばなかった点につきましては、どうかご海容の程願ひ上げ奉ります。

青年会で得られるものは、顔見知りが増えるのではなく、同じ道を歩む素晴らしい個性に出会い、また個人では出来ない様々な経験をさせて頂くチャンスを与えて貰えることでしょうか。是非皆さんも青年会の行事に参加頂きたいと思っております。

最後になりましたが、青年会の隆昌と関係各位の益々のご発展をお祈り申し上げます。

副会長 就任以来、早二年が経とうとしていきます。この間、中野会長を初め役員の皆様には多大なるご協力を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。

平成十七年は、神宮式年遷宮元年にあたり、様々な諸行事が行われ、神宮のお膝元である三重県神道青年会として、携わることができたのは大変意義深いものです。私自身、御樋代木の奉迎送では、桑名に到着後伊勢まで随行し、津では前導神職としてご奉仕できたことは神職として嬉しく思います。

さて、この二年間、主な研修会のテーマを御遷宮として活動してきました。普段の神明奉仕の中で、あまり神宮に関して学ぶことはなく、いざ参拝者などに「お伊勢さんの…」と質問をされると戸惑ってしまうのが現状です。しかし、研修を積み重ねることで、このような戸惑いが一つでも解消できないかと役員で内容を含味しました。その結果、氏子に対し説明ができるようになる研修会や、前回の御遷宮の裏話などこれまでの教科書で学ぶような研修会とは違ったものになりました。また、ブロック研修会では、会員以外の支部の神職、青年会OBの多くの方々が年々参加していただくようになってまいりました。

しかし、三重県神道青年会も十年程前とは違い、役員若年層化、専門神職の減少、別表神社の神職増加など、組織運営がかなり変わってきました。また、行事への参加者が減り、お宮の子供会では、少子化の問題もあり神職子弟がほとんどいなくなり、開催地の子供を集めるなど社会現象の波がここにも現れています。

このような多くの問題を抱えつつも、今後の青年会活動はその年のテーマを決め、大勢の方が参加できる行事を行うべきと考えます。その為にも、OBを始め諸先輩方のご理解、ご指導、ご協力を賜りたく存じ上げますと共に、役員は一丸となり魅力ある会にしていきたいと思っております。

定例総会

平成十七年度定例総会が四月十七日、神社庁会議室にて中野会長以下役員、会員十八名、来賓二名の出席にて開催された。

開会儀礼の後、会長挨拶、来賓の三重県神社庁石上副庁長・中森秀治三重県氏子青年協議会長より祝辞を頂戴し、その後高橋副会長を議長に選出し議事へと移った。

まず会長より十七年度会務報告、事務局より会計決算報告、監事より会計監査報告が行われ、夫々承認された。引続き役員補選が行われ、会長指名理事及び書記が指名された後、十八年度活動方針案並びに事業計画案、同会計予算案が審議されて承認を受け、定例総会は滞りなく終了した。(原 記)



新職員交流会

七月十二日、伊勢市の県営体育館において恒例の新職員交流会が開催された。当日は中野会長を始め二十八名(新職員十二名)が参加し、ソフトバレーが行われた。ソフトバレーとは、柔らかく少し大きなバレーボールを用い、近年若男女問わず楽しまれているスポーツである。



各ブロックを基本とし、五、六人でチーム分けを行い、リーグ戦方式で試合が行われた。三十度を越す暑さの中において、汗がほとばしり、活気みなぎる白熱した試合が繰り広げられ、その中でも経験者を要し実力で頭一つ抜き出た北部チームが優勝した。スポーツを通じて交流を深め、各チームはもちろん皆固い絆で結ばれたことは言うまでもない。終了後は神宮会館にて、懇親会並びに表彰式が行われた。新職員を始め、志を同じくする仲間として、会員一同お互いに交流を深め、充実した時間を過ごすことができたと。(西本 記)

お宮の子供会

第二十八回お宮の子供会は八月二十三・二十四日の日程で伊賀市に鎮座する陽夫多神社(神田徳夫宮司)にて開催された。

初日、好天のもと中野会長を始め三十二名(子供十六名)が集まり、まず神田渉外福祉委員長を齋主に正式参拝が行われた。会長に合せて子供達は皆神妙な面持ちで拝礼を行った。その後開会式に続いて、三つに分かれた班の名前を各々決め、旗を作成した。子供達は思い思いの発想で描き、上手に仕上げていった。その後、参加者全員でゲームや映画鑑賞を行った。

夕食後は、庭療の集いを行い、子供達の出し物の他に会員による演劇『ヤマタノオロチ』も披露された。この日の為に、教化研修委員会では入念な準備が行われていた。配役の各員が使うお面や剣などの小道具にも趣向を凝らしており、会員皆にはこの演劇にかける思いが伝わっていた。子供たちが映画鑑賞をしている間、舞台での稽古も行い、迎えたその本番。石上教化研修委員長のナレーション

会務報告

〈平成十八年四月〉
一日 神社総代会定例総会
一名助勢奉仕 神宮会館
神道青年東海地区協議会
三名出席 熱田神宮会館
平成十七年度総会
一七日 一八名出席 神社庁
二六日 第五八回神青協定例総会
四名出席 神社本庁

〈五月〉
一八日 伊勢神宮式年遷宮奉賛会
三重県本部設立総会
八名助勢奉仕 神宮会館
二九日 第一回役員会
一五名出席 神社庁

〈七月〉
四日 第二回役員会
一四名出席 神社庁
六日 神道青年東海地区協議会
四名出席 熱田神宮会館
二二日 新職員交流会
二八名参加
県営総合競技場・神宮会館

〈八月〉
九日 第三回役員会
一二名出席 神社庁
二二(二四)日 第二八回お宮の子供会
一四名参加 陽夫多神社

〈九月〉
七日 神道青年東海地区協議会
総会及び教化研修会
一名参加名古屋市内
一三日 神宮・南部ブロック研修会
三三名参加 神宮司庁
二六(二七)日 神青協夏期セミナー
六名参加 國學院大學

〈一〇月〉
三日 敬神婦人連合会定例総会
助勢奉仕
一名奉仕 神宮会館
第四回役員会
一二名出席 神宮会館
五日 北部ブロック研修会
二九名参加 多度大社
一日 神青協臨時総会
二名出席 神社本庁
一五(一六)日 第三五回初穂曳
二名参加 伊勢市内

三〇日 三重県神社関係者大会助勢奉仕
一三名奉仕 神宮会館
第五回役員会
一三名出席 神宮会館

〈一一月〉
二五日 日本会議三重総会
三名助勢奉仕
二八日 中部ブロック研修会
二四名参加 神社庁

により、子供達に昔話を語り聞かせるといふかたちで進められた。我々の思いが通じたのか、子供達は熱心に観ており、会長が演じるスサノオノミコトがオロチに立ち向かう場面では、子供達から「スサノオがんばれ!」という声援も上がっていた。その後は花火やゲームで楽しく遊び、夕拝の後就寝となった。



翌朝、清々しい空気の中で境内清掃が行われた。朝食後にはバスにて「モクモク手づくりファーム」へ移動。パン作りや温泉につかるなど、和やかな時間を過ごした。その後は神社へ戻り、正式参拝・閉会式が行われ、全日程を終了した。

少子化の影響か、参加する子供の数が年々減少しつつあるが、斯界の後継者を育てるべく、楽しい行事となるよう今後も会員皆で努めていきたい。(佐藤 直 記)

神青協夏期セミナー

九月二十六日、二十七日の二日間、國學院大學に於いて「皇室と国民の絆―皇室の伝統とともに―」を主題として、神青協夏期セミナーが開催された。

第一講は「御皇室と日本―我が国の力の源泉は国がらから発している―」と題して、外交評論家の加瀬英明氏による講義が行われた。皇室と諸外国の王家を比較しながら、日本は天皇を中心に国民が結束し、その歴史が二千年以上続いているという特色を述べられた。

第二講は「民主主義と皇室―日本の伝統的な君民関係を再認識しよう―」と題して埼玉大学教授の



長谷川三千子氏により講義が行われた。先生からは民主主義の成り立ちについて説明された後、日本では十七条憲法、五箇条のご誓文など、古来より民主主義のあるべき姿が天皇を始め国民の意識の中にあつたと話された。

第三講は「大和民族としての自覚と自尊―小泉八雲の警告―」と題してノンフィクション作家の関岡英之氏により講義が行われた。近年の日本と米国の政治的関係を踏まえ、小泉八雲が説くように、日本人は神道の精神から、無意識に自然と共存共栄してきた素晴らしい民族性をもっている。これを強く自覚して行動すべきであると話された。

第四講では國學院大學教授の大原康男氏により第三講までの総評に加え、悠仁親王殿下の御誕生についても話された。先生からはこの度の御慶事への祝意と共に、男性・男系天皇の継承を守るための方策について説明された。今回のセミナーで、皇室についての知識を深めると共に、皇位継承の現状を知り、神職として何ができるのか考えさせられ、大変有意義であった。(宮本 記)

神道青年東海地区協議会 教化研修会

九月七日・八日の両日、名古屋国際ホテルを会場に神道青年東海地区協議会の教化研修会が開催され、本会からは会長始め十一名が参加した。

まず研修会に先立って行われた協議会の総会では、前日の秋篠宮悠仁親王殿下の御誕生という御慶事を受けて「我々青年神職はより一層皇室の尊厳護持と神宮の真姿顕現という使命達成のために邁進しなければならぬ」との決議文が全会一致で採択され、また講演会後には、急遽参加者全員により会場周辺にて、日の丸の小旗二千本の配布を行い、広く市民とともに御慶事をお祝い申し上げた。

さて、研修会は「青年神職として時局問題を考える」青少年の教育問題と憲法改正についてと題して、参議院議員の山谷えり子先生より講演を頂いた。内閣府大臣政務官として男女共同参画や皇室典範の改正問題等を実際に担当された先生から、これら諸問題に対する永田町の政治の現状やご苦労についての生のお話しをお聴

かせ頂くとともに、構造改革と教育改革は両輪であるとの信念から取り組まれている、教育正常化問題、育児問題にも話が及んだ。

また、神宮への修学旅行生が減少していることや、靖國神社の問題にも触れ、ひとりひとりが日本という国について考え、次代を担う子供たちの心を育むことにより、日本人としての命と記憶がついていくことができるということについても熱く語られた。

戦後六十年にわたって歪められてきた学校教育は、国民の国家に対する奉仕の精神を失わせただけでなく、ついには家庭のあり方も崩壊させつつある。今こそ山谷先生も仰った「戦後の宿題を片付ける」べく、我々青年神職はこれらの諸問題について問題意識をより深め、日本人としてのあるべき姿と心を取り戻していかなければならない、という重い使命があることを改めて考えさせられた研修会であった。

(中西 記)



大麻頒布促進運動

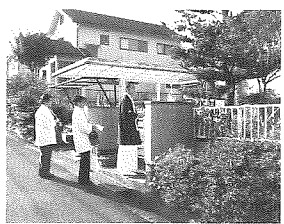
十二月二日(土) 神社庁が執り進める「モデル支部制度」頒布運動に、昨年に続き本会も参加した。今年の名張支部内の梅が丘団地にて行われ、本会からは中野会長始め十四名の会員が参加し、参加者は名張支部の神職・総代・敬神婦人会・神宮研修所の学生を合わせて約百名を数えた。

当日は晴天に恵まれ、まず杉谷神社(長谷川雄一宮司)にて頒布始祭斎行の後、神職・総代・敬神婦人会が三名一組の三十班に別れて頒布にあたった。大勢による活動で意気込むが、現実は大変厳しいものであった。私も七十軒程の家を廻るものの留守宅が多く、住人がいてもインターホン越しに会話をするだけに留まり、中には「うちは宗教は結構です」と会話すらままならない場合もあった。

活動の結果、約二一〇〇戸を廻り、新たに一四九体を頒布した。しかし、これが決して満足のいく結果ではない。事前に広告を配り、当日も広報車が宣伝をするなど、活動自体は積極的に行われていたが、近年の世情を反映してか、家々

の門扉は固く、大麻についての十分な理解が得られなかった事が原因ではなかったかと考えられる。活動を共にした総代の一人は、「顔を見せて直接会話をすることもままならないのでは、頒布数を増やすのは困難なのでは」とコミュニケーションの取りづらいうい現状に困惑されていた。

近年、ニュータウンやマンションが次々と建設されてゆく中、大麻頒布率は減少の一途をたどっている。新たな氏子区域に御札を配るのは大切な事だが、まずはコミュニケーションの取りづらいういこの現状をなんとかしなければならぬ。別の総代さんからは「見知らぬ他人を訪問するよりも、氏子・総代が別居している自分の子供や孫に話をした方がより確実に頒布できる。また、ニュータウンならば、その自治会の会長さんに協力を仰いだ方がよいのでは」とご意見を頂戴した。いずれにせよ、今後新たな方法も考えなければならぬ時期にきていると実感した頒布運動であった。(山田 記)



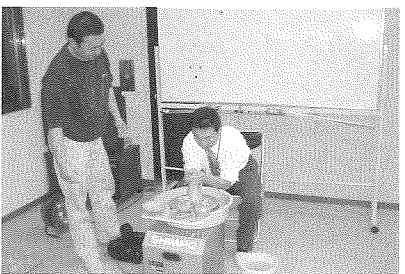
神宮神青との合同研修会

三月二日午後五時半より、神宮育成会館に於いて、神宮神道青年会との合同研修会が開催され、両会合わせて三十二名が参加した。今回は、神宮司庁調度部御料地課長森俊嗣先生に「神宮の御料」と題して講演頂いた。

御料とは天照皇大御神をはじめ諸神に供進される御品のことである。講演ではそのうち、米・酒・塩・水・干鯛・鮓・野菜・果物などの神饌品、神御衣の和妙・荒妙、器として用いられる素焼きの土器について、概要を説明頂いた。

現在も、米や野菜・果物を栽培する神田・御園(伊勢市)では、用水に五十鈴川の清水が引き入れられるなど、清浄を第一に大切に育てられている。また、塩も海水より採取する「入浜式」と言う古式の製法のまま製塩されている。これら多くの御料品は、倭姫命がお定めになったと伝えられ、今日でもその伝統を守り、自給自足で賄われているとのことであった。祭典に供される神饌の品目や数は、旬のものを中心に定められている。しかし、近年顕著にみられ

る気候の変化は、栽培する作物の成育や時季に影響を与えつつある。今後も古儀を守り供進していくには、より細かな配慮が必要であると結ばれた。



続いて同所に於いて、土器調製に携わっている川西泰二郎先生に、御酒台・水碗・横瓶など祭典に使用される土器の製作を実演して頂いた。先生は二分足らずで一つの土器を作り上げ、一同は感嘆しきりであった。神宮では、年間六万個もの土器が使用され、その全てを一人で仕上げているとのことであった。最後に、参加者を代表して中野会長をはじめ四名の会員が土器の製作を体験した。

目まぐるしく変貌していく世の中であって、時代と共に流されるのではなく、守るべきものを守り、受け継いでいくことが、如何に難しいかをあらためて感じた研修会であった。(宮田 記)

〈二月〉

- 二日 神宮大麻頒布促進運動 一五名参加 名張市・梅が丘
- 四日 神道青年東海地区協議会 三名出席 愛知縣護國神社
- 五日 敬國神社例祭助勢奉仕 五名奉仕
- 七日 第六回役員会 一三名出席 神社庁忘年会 一八名参加 津市内

〈平成十九年一月〉

- 二九日 第七回役員会 一一名出席 伊勢市内新年会 二三名参加 伊勢市内

〈三月〉

- 四日 建国記念の日啓発活動 (神宮ブロック) 八名参加 宇治橋前 氏子青年協議会・神道青年会合同研修会
- 七日 建国記念の日啓発活動 (中部ブロック) 八名参加 神宮司庁
- 八日 建国記念の日啓発活動 (北部ブロック) 五名参加 津駅前
- 九日 建国記念の日啓発活動 (南部ブロック) 四名参加 おかげ横丁
- 二四日 神政連・総代会共催時局

〈三月〉

- 二日 第八回役員会 一一名出席 神宮育成会館 神宮神青・泉神青合同研修会 一〇名参加 神宮育成会館
- 八・一〇日 県外研修会 八名参加 宮崎市内

卒業生名簿 (平成十七・十八年度)

- | | |
|------------|-------|
| 三重縣護國神社権禰宜 | 中野 雅史 |
| 石部神社権禰宜 | 諸岡 賢 |
| 苗代神社権禰宜 | 牧野 芳子 |
| 足見田神社宮司 | 横山 正純 |
| 玉瀧神社権禰宜 | 岡本 和宣 |
| 国津神社権禰宜 | 森下 大介 |
| 頭之宮四方神社権禰宜 | 中里 貴彦 |
| 二見興玉神社権禰宜 | 竹内 孝彦 |
| 大皇神社権禰宜 | 小倉 理 |
| 瀬古泉神社権禰宜 | 牧野 洋司 |
| 江田神社権禰宜 | 福山 典麿 |
| 城南神社権禰宜 | 松永 栄甫 |
| 神宮宮掌 | 辻村 光生 |
| 神宮宮掌 | 音羽 悟 |
| 神宮宮掌 | 久田 哲也 |
| 神宮宮掌 | 杉浦 信良 |

建国記念の日啓発活動

本年も、次世代を担う青少年に建国記念の日奉祝の意義を伝えるべく、各ブロックで花の種を添えたチラシを配布する活動を行った。

北部ブロック

活動日 二月八日(木)
場所 近鉄四日市駅前
参加者 十一名

当日午後、会員は八阪神社に集合し、改服の後四日市駅へ移動した。時折雨が降る肌寒い天候にも拘わらず、約二時間啓発のチラシを通行人に配布した。

天候も影響してか、足早に通る過ぎる方が多く見受けられたが、会員がそれぞれに声をかけて説明すると、建国記念の日が単に祝日と捉えていた方も、その奉祝の意義を認識していたようであった。今後、日本の歴史や伝統を正しく伝えるべく、青年



会の様々な活動を、更に活発にしていきたい。(日紫喜 記)

中部ブロック

活動日 二月七日(水)
場所 近鉄津駅前
参加者 五名

当日は活動時間が夕方というところもあり、チラシの配布は自然に学生・主婦が中心となった。今回の活動を通して強く感じたことは、一人ひとりに活動の趣旨を説明し、理解してもらう事はもちろん大切だが、その前に最初の取り掛かりとして、まずチラシを手に取ってもらうことが如何に重要であるかを痛感した。

今回チラシを受け取って頂いた人々が、建国記念の日の意義について考えるきっかけになることを願うものである。(宮崎 記)



南部ブロック

活動日 二月九日(金)
場所 おかげ横丁・おほらい町
参加者 四名

穏やかな日和の中、昨年の経験を生かし、本年もおほらい町で配布することとなった。

活動が午前中であったこともあり、人通りが少なく、思うようにはかどらないまま時間だけが過ぎていったが、徐々に人も増え、本年から職を持参したことも相まって当初の予想を大幅に上回るペースで順調に配布することができた。青年層に限らず、全国から集まった大勢の方に、この活動を通して改めて建国記念の日の重要性を理解して貰えたものと感じている。(渡邊 記)



神宮ブロック

活動日 二月四日(日)
場所 宇治橋前
参加者 八名

本年からは、啓発ポスターに加え新たに職も用意され、より一般の方に分かりやすい形での活動となった。

この日は団体の参拝者が多く、会員各位はなるべく個人、特に若年層への配布を試みた。職の作成が功を奏してか、参拝者の方も快くチラシを受け取って頂いた。会員の積極的な奉仕の甲斐あって、用意したチラシも三十分足らずで全て無くなった。

今回の活動により、少しでも多くの方が建国記念日を奉祝し、祝祭日には国旗を掲げて頂き、またお配りした花の種が夏には全国各地を綺麗に彩る事を期待したい。(鏡谷 記)



氏青との合同研修会

二月四日、伊勢市において本会と氏子青年協議会との合同研修会が開催され、氏青は山元副会長始め十六名、本会からは中野会長始め八名が参加した。

この研修会は氏青と神青が隔年で担当し、研修を通じて両会の交流を深めることが大きな目的である。今回は本会が担当で、内容は皇大神宮(内宮)の神域を高橋副会長(神宮宮掌)の案内のもと巡拝しながら研修するというもので、両会は神宮司庁へ集合し、まず開会式が行われた。その後、五十鈴川の御手洗場にて手を清め、正宮へと五十鈴川の清き流れに沿って参道を進み御垣内にて参拝を行った。

正宮隣の古殿地では現在、中央に覆屋根が設けられ、その中に神聖にして神秘的な「心御柱」が納められ、風雨にさらされないようにお守りされている。今後、古殿地で行われる工事関係のお祭りや、遷御と共に新たに調進された御装束・御神宝を新宮へ納められるまでの諸祭がどのように斎行されていくのかをご説明頂いた。



その後、別宮・撰末社の由緒についての説明を受けながら神域内を巡拝した。当日は休日とあってか、老若男女たくさんの参拝者が見受けられた。例年以上の人数と伺い、遷宮に向けての広報・啓発活動が実を結びつつあることを実感した。

研修会後、「とうふや」にて懇親会を行い、互いに親睦を深めつつ、式年遷宮の機運をさらに盛り上げるため、両会が協力していくことを誓い合った。(宮岡 記)

神青協中央研修会

三月八日から九日にかけて、『肇國』〜皇祖発祥の地で皇室の尊厳護持を誓う〜をテーマに、神道青年全国協議会中央研修会が、宮崎市の宮崎観光ホテルに於いて開催された。この地に全国から総勢三八四名の参加者が集い、本県からは中野会長を始め八名の会員が参加した。

初日は第一講として「神武天皇東征伝承」と題し、元産能大学教授で、日本古代史が専門の安本美典氏より講義を頂いた。氏は古事記・日本書紀に記されている、神武天皇東征の伝承は、出土品や地形図などに裏付けがきちんとされていると述べられた。

第二講は「御皇室と日本の国柄」と題し、高千穂神社宮司後藤俊彦氏より講義を頂いた。後藤氏は、高千穂神楽のヨーロッパ公演などで、諸外国を訪れた経験を基に、皇室を頂く我が国の文化が、如何に素晴らしいものかを述べられた。その上で、日本文化の根本をなす神道は、命を繋ぎ命を育む使命を負い、先祖からの伝統を守り、子孫に伝え、世界に役立つ神道の理



祖先が培ってきた、皇室を頂く我が国の美しい伝統を、守り伝えていくために、努力していかねばならないと、気持ちを新たに二日間の研修会であった。(伊藤 記)

ブロック研修会

この研修会は、青年会の会員だけでなく県内各支部の神職にも参加を呼びかけ、交流の輪を広げることにも目的としている。本年度五回目のブロック研修会は、『御遷宮』を共通のテーマとして執り行われた。

北部ブロック研修会

開催日 十月五日(木)
場所 多度大社
参加者 二十九名
テーマ 戦後の遷宮の変遷
講師 多度大社 宮司 賀勢 弘

賀勢先生は、神宮禰宜として平成五年の第六十一回式年遷宮に御奉仕されており、神宮在職中の経験談も交えながらお話頂いた。

まず遷宮の祭儀・歴史について解説され、明治以降に行われた遷宮の諸相について述べられた。中でも戦後初めての遷宮は、敗戦により国民の生活も困窮して



おり、先帝陛下の思召しにより延期となった。本来遷宮が行われる昭和二十四年には、全国崇敬者の熱意により宇治橋のみが架け替えられた。先生は、この宇治橋こそが、当時の人々に勇気を与え、今日の先進国となる日本人の心の支えとなったと述べられた。

先人達は、伝統の心を守り伝えることで日本を復興させようと頑張ってきた。私たちは、今ここで先人達の思いを受け継ぎ、第六十二回式年遷宮が麗しく斎行されるよう努めていきたい。(遠藤 記)

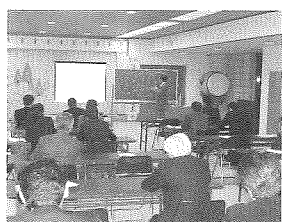
中部ブロック研修会

開催日 十一月二十八日(火)
場所 三重県神社庁
参加者 二十四名
テーマ 社頭講話で話せる遷宮の話
講師 神宮司庁 広報室 係長 石垣 仁久

先生には「なぜ遷宮をするのか」、「なぜ二十年ごとなのか」、「なぜ神宮で行われるのか」の三点より講義頂いた。

神宮の祭祀の主体は天皇にあらせられ、遷宮御斎行の中心もまた

天皇にあらせられる。遷宮が無事斎行されるのが重要と話された。



遷宮には、殿舎はもとより、御装束・神宝などの調度品も新しく調えられ、その制作にあたっては技術の伝承という文化的意義もある。また二十年という年限の根拠には、櫛の貯蔵年月との関係も考えられるとの説には、個人的に勉強させられた。

今後、私たちが皇室・神宮・神社の繋がりを社頭で説くなかで、氏子・崇敬者との繋がりを深め、その輪が「和」となって、今忘れかけられている日本人の心を取り戻し、更には世界平和へと広がればと願うものである。この研修会で得た知識を社頭での遷宮奉賛に繋げるよう精進していきたい。

神宮・南部ブロック研修会

開催日 九月十三日(水)
場所 神宮司庁
参加者 三十三名
テーマ 参宮案内の心得

御木曳体験記(川曳)

七月三十日(日)、会長を始め十名の会員は内宮領の御木曳行事に桜が丘奉曳団の一員として助勢した。

当日は好天に恵まれ、会員は早朝より揃いの法被を身にまとい、出発式に参加した。

この日御木曳を行うのは桜が丘を含む六団。その順番は予め話し合いて決められており、桜が丘は三番目である。各奉曳団とも、合いが入っており、ソリに載せられた御木は人々の木遣りの掛け声に包まれながらゆっくり進む。二十年に一度の伝統行事であり、それを受け継ぐ旧神領民の心が喜びの形となって引き綱を左右に練るのである。予定の時間を遅れて桜が丘奉曳団も御木曳を開始した。我々も腰まで水に浸かりながら「エンヤヤー!」の木遣りの掛け声高らかに、心清々しく、そして勇ましく引き綱を曳いた。

当日、秋篠宮殿下と眞子内親王殿下には外宮・内宮を御参拝なされ、その後神宮道場裏に設けられたテントにて川曳を御視察された。

講師 神宮司庁 広報室 係長 石垣 仁久

当日は小雨が降るなか、石垣先生には白衣・白袴姿で実際に内宮をご案内頂き、案内者としての立ち居振る舞い、話し方、ポイントになる場所などを丁寧にご説明頂いた。その後、神宮司庁において「遷宮の広報について」と題して講義を頂いた。現在、神宮における広報活動は、ホームページ・パンフレット等の刷り物・マスコミ・クチコミの四本柱で構成されている。先生は各々の長所・短所を紹介しつつ、それらの要素をいかに取り込み展開することが重要であるかを述べられた。

我々神職は、神宮の職員に限らず、神宮参拝を案内する機会がある。その際に、神宮及び各奉仕神社の関係について氏子・崇敬者にお話できることは、各神社の興隆、更には遷宮奉賛にも繋がる。三重県の各神社に奉仕する私達が、その先頭に立って案内内できるよう、日々勤めて参りたい。(佐藤 記)

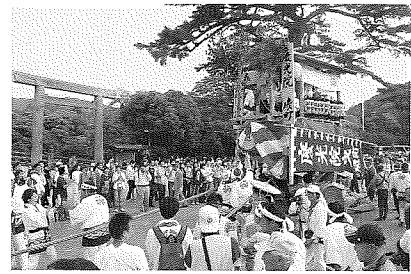


御木曳体験記(陸曳)

「エンヤヤー、エンヤヤー」、伊勢の街は週末の度に揃いの法被姿の人々であふれ、木遣り唄の声と御木曳車から発せられる「ワン鳴り」が響きわたる。第六十二回式年遷宮の御用材御木曳行事である。五月二十九日(月)、私は数ある奉曳団の中でも唯一宮川から内宮まで(約九キロ) 陸曳きを行い、そしてご用材のなかで一番太い内宮御扉木を奉曳する磯町奉曳団(通称慶光院曳)に参加させて頂いた。

御木曳日和である。道中、揃いの法被に袖を通した約千八百人の仲間、左右の綱を中央で合わせ押し合いをして練る。御木曳には欠かせない楽しみだが、なかなか前には進まない。出発してから十一時間、御木曳車と奉曳団は、内宮宇治橋前に到着した。神路山に夕日が沈む中、内宮に向かって木遣り唄が捧げられた。しかし御木を宇治の工作場に納めるまでまだまだ終わらない。おはらい町では奉曳団のわくを越えて、地元宇治の方も参加し、にぎやかに進んだ。あたりが真っ暗な中、提灯に守られた御木曳車は浦田橋に差し掛かるとスピードを上げた。みんなが一斉に走り最後の「エンヤ曳き」だ。

当日は前日からの大雨が心配されたが、早朝こそ小雨が降っていたものの、その心配を払拭するような天気には恵まれた。



御木は無事に工作場へ到着し、長い一日が終わった。老若男女、笑う者、涙する者もいるが、自然と拍手が起こり幸せな空気に包まれた。これが時代を越え伝統が繋がった瞬間なのであろう。私も二十一年に一度の慶光院曳の一員として奉仕できたことをうれしく思い、この思いを胸に明日からより一層の御奉仕に努めることを誓った。(西本 記)



平成十九年度中の 御遷宮諸行事について

五月四日～七月二十九日

御木曳行事(第二次)

第一次の御木曳行事と同じく内宮では五十鈴川で川曳、外宮では御木曳車で陸曳を行います。本年も五月から六月にかけて「一日神領民」も参加します。

展覧会のご案内

神宝展など、全国の博物館・デパートでは神宮関係の資料が出陳されます。左記の各地へ出向く際は、是非お立寄りください。

開館記念特別展「神々の至宝」

鳥根県立古代出雲歴史博物館

平成十九年三月十日～五月二十日

「伊勢神宮」展

札幌三越デパート(北海道)

四月二十四日～四月三十日

鶴屋百貨店(熊本)

八月一日～八月七日

主催 伊勢神宮式年遷宮広報本部

「伊勢の神宮」展

埼玉県立歴史と民俗の博物館

十月十六日～十一月二十五日

主催 霞会館

神青協『神宮式年遷宮の

“ごころ”を守り伝える委員会』

委員就任について

石上 陽 祥

この度、神青協東海地区協議会より、神青協『神宮式年遷宮の“ごころ”を守り伝える委員会』(以下遷宮委員会)の委員を務めさせて頂くことになりました。

遷宮委員会は、昭和五十九年九月に神青協の田中恆清会長(当時)が、遷宮奉賛の“ごころ”を守り伝えるための啓蒙活動は如何に在るべきかを問うべく、「遷宮の“ごころ”を守り伝える委員会」を諮問機関として発足させたのが始まりで、現在は神青協の特別委員会として各地区から一名ずつ選出され活動しています。

日本は木の文化、西欧は石の文化と云われています。木の文化の代表は神宮の唯一神明造の社殿、石の文化の代表はギリシャのパルテノン神殿。どちらも古く歴史があります。パルテノン神殿は今や信仰も祭りも失われ、神殿は廢墟と化しています。一方神宮の社は木造りで、掘っ立て柱という土中に柱を埋め、朽ちることが前提の工法で造られていながら、遷宮によって二十年ごとに更新され、約千三百年の歳月を経て尚端正な姿を伝えていきます。この違いは何か、それははるか昔から現在にいたるまで、祖先から連続と受け継がれてきた“ごころ”があったからです。今に生きる私たちもまた、祖先から受け継いだ“ごころ”を変えられないことなく次世代へ正しく伝えていかなければなりません。

一年に四季があるように、私達の活動も一つの節目を迎えようとしています。昨年も青年会では様々な事業に取り組んできました。

各会員の原稿からは、各種の研修会・体験を通じて得られた様々な思いが窺えます。同じ道を志す仲間達と活動するなかで喜びを分かち合い、御木曳行事の華やかさを味わう一方で、大麻頒布の現状からは「伝統を守り伝えること」その重み、厳しさを感じたのではないのでしょうか。

第六十二回神宮式年遷宮に向け、三重県でも奉賛会が設立され、各方面で準備が進められるなか、我々青年会が携わる場面もあろうかと思えます。今私達が出来ること、そして第六十二回の先にある遷宮に向けて何をすべきかを考えつつ、次の青年会活動に取り組んでいきます。(了)

編集後記

会報「榊 葉」

第33号

平成19年3月31日

発行者 中野雅史

編集 総務広報委員会

発行所 津市鳥居町210-2

三重県神社庁内

三重県神道青年会